
タナトス

とも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タナトス

【Nコード】

N7360W

【作者名】

とも

【あらすじ】

いつかわからないくらい先の未来、タナトス博士の生み出した新しい概念、タナトス。此れを自在に操れる少女イオ、そしてその主治医関谷、そして魔術師の紫苑が繰り広げる 騙し合いじみた遊戯の物語。 昔のサイトからの再掲です。

歴史が進み、科学や魔術が、人類や世界が改変を重ね進歩を刻みやがてのつびきならない最先端という末期に達したとき、それは発見された。

タナトス、と呼ばれる。

タナトス教授により発見され概念付けられ為そう呼ばれるが、奇しくも死を表す名前であり、ある意味ではその本質を言い当てている。肉体は魂の有機的人れ物に過ぎず、生命の本質は魂といういわゆる一種の信号伝達の現れである、

という仮説から出発した教授は高々数年のうちにその信号を計測することに成功した。

当初は周囲からも学会からも、世界から見放され嘲られ見下されていた仮説も、

教授がタナトスを測定しやがては信号を変換し可視化することに成功した時には人類史上に名を残す発見とまで称賛されるにいたった。

両手を返したような周囲の態度に対して、しかし、教授は只、

総て世に存在する限りにおいて如何に無用な物と云えど有益な存在価値を備えていると謂うことが証明されたというわけだ、と最愛の夫人に洩らしたただけだそうだ。

しかして、ここからタナトス学が始まったわけである。

現時点に於いて学問の主眼は如何に魂と呼ばれる信号状態で周囲に影響を及ぼすかということにある。

それはまるで電磁波に似て、やりようによつては場を作り力を作用させたり波動として伝達を行う事が出来る。

もはや可視化という段階はとうに過ぎ、装置を用いて誰もがタナトスを見る事が出来、またタナトス状態に至ることも可能だ。

だが、タナトス状態で某を行うということに関してはまだまだ発展途上であり、タナトスに外部から影響を与える方法もまだ確固たるものではない。

タナトス状態における肉体を教授の夫人の名をとりコギトと言う。

このコギトに受けた影響はタナトスに波及する、それだけがわかっているのである。

この分野の第一人者はタナトスの系列であるイオという年若い少女である。

イオ・タナトス。

この名はしかし伝説或いはおとぎ話のように広がっている。

様々な噂が飛び交い中にはもっともらしい物もあればまったく冗談のような話もある。

それだけ彼女には目覚ましい業績があり、一方でまったく世界に姿を現していない。

いくつか彼女に付けられたあだ名がある。

弾き者。

まさしく然り。

このイオという少女は好んでタナトス学を研究しはじめた訳ではない。

ただ、せざるを得ない状況に陥った為、仕方なく始めた、

そしたら思いもかけず色々なことを発見してしまい辞める事も出来なくなつたしまった、というのが真実に近い。

かつ、彼女はタナトス学を研究するにあたり有効な性質を備えている。

先天的なものか或いは後天的なものかは今となっては知りようがないが、彼女はタナトスを自由に扱う事が出来るのだ。

自己も他者も限らずに。

それは一種の才能であり、彼女はなるべくして研究者になつたと言われる所以である。

殊に公になっている事実といえばタナトス教授とコギト夫人はイオを激愛しているということである。

偏愛。

愛しているからこそ、彼女が癌になることを畏れてその子宮や片肺、片腎などの臓器を出生後直ぐに摘出したとの逸話すらある。

事の真偽はともかく、そんな噂さえ生まれる程二人のイオへの愛情の注ぎ方は尋常ではない。

また、確かにイオは定期的に通院している。

そして、そんな物騒な噂を否定しないくらいに彼女は自らが多くの物を欠損していると自覚し信じていた。

通院も彼女のホルモン疾患に由来する。

不足するホルモンを補充しにいくのである。

このホルモン疾患は彼女の才能、タナトスを自由にする能力に少なからず関与していると言える。

補充を怠ったばかりに生死の堺をさ迷うということを幼い頃から幾度となく繰り返すうちにタナトスという状態、

通常では有り得ない状態に慣れていったのだろう。

タナトスではない状態、即ちタナトスとコギトが一体となっているいわゆる通常の状態をアモいう。

愛する、という言葉からとったという。

タナトスとアモには境界があると言われる。

アモからタナトスに移るには乗り越えるべき壁が存在する。

その壁は高く、乗り越えるのは想像を絶する苦難をつけると謂われている。

イオには、しかしその壁がほとんどなかったのだ。

それが幸か不幸かは判じ難い。

或いは判断の必要も意味もない事だろう。

さて、イオは例の如く病院に来た。

迷いもせず廊下を進み角を曲がり階段を登っていく。

元々人気の無い静かな院内でも、それこそ誰も気が付かないような奥まった一角にある白い扉のノブに手をかける。

思い出したように軽くノックをして扉を開けると、

其所には白く小さな寝台と白い木製の戸棚と白い円卓と椅子が二脚在るだけである。

壁も床も天井も、カーテンすら白いその部屋は彼女が長年通うそのまま、

一度も全く変わらない見慣れた景色である。

そしてその部屋で唯一白を持たないもの、部屋の主もまた長年全く変わらない。

真っ黒な長い黒衣にまるで幼くしかし整った顔。

果たして何歳なんだろう。

尋ねてもはぐらかされる。

本人も憶えていないのかも知れない。

知らなくても支障は無いため既に知る努力は放棄したが、イオはこの部屋に入る度思う。

タナトスに干渉できる事なんかより余程この人の方が凄いいのではないかと。

そして空いた椅子に腰掛ける。

次いで黒衣の医師は戸棚から小さな機械とアンプルを取り出し、

慣れた仕草で準備するとイオの頸に充てる。

穏やかな沈黙。

時折、頸に充てられた機械から微かな振動音が響く。

暫くしてイオが口を開く。

「関谷、まだ禁煙してるの？」

関谷と呼ばれた人物、黒衣の医師は機械を支持する手を動かすことなくさも面倒な様子で口を開く。

「…つたりまえだろ。味覚が麻痺しはじめちまったんだから、辞めるしかねーよ。煙草にまで変なもん入れやがって」

「…ふうん」

そしてまた訪れる沈黙。

ちりん、と鈴の鳴るような音がして、機械が止まった。

頸から外される。

幾度となく繰り返し返された行為。

「終まいだよ」と言いながら関谷は機械を戸棚に戻し空になったアンプルを棄てる。

イオは座ったまま呟く。

「有難う。…疾うにもう、薬を打ちに来るのを忘れてたり、打たなかったらどうなるかなんてするのを止めたけど、

それでも、打つ度自分は救いようの無い程欠損為てるんだって思う」

関谷は何も言わない。

窓から陽光が差し込む。

その温かさに、イオは、少しだけ、失った心が動かされる気がする。

幻肢痛のように。

関谷が戸棚から、菓子と魔法瓶を取り出し、ちよつとしたお茶会の用意をする。

そしてイオの対面に座ると言った。

「食べ、旨いぞ」

イオは殆ど解らないくらいに微かにしかし確かに口角を上げ、微笑んだ。

そしてうなづき、菓子を口にす。

関谷は誰に対しても何に対しても厳しく、

同様にこの小さくて狭くて遠い奥まった角の小部屋を使い続けるよ
うな人物である。

諸々の事情により滅多に外に出ることが叶わないイオが唯一堂々と訪れる場所は、

だから陽当たりの良い穏やかなまなのである。

イオの耳元でフルフルと振動が生じる。

暫く続くそれは一種の暗号であり、発達した伝達手段である。

受信するイオの表情が僅かに硬化する。

よく見ないと気付かない程度に。

尋ねなくともわかる。

「仕事か」

「そう」

最近の仕事はタナトスに関連した犯罪の調査、研究が大部分を占めている。

無論、タナトスなど通常の状態では関連しえない為、彼女の扱う物は多かれ少なかれ異常性を有している。

幼く特に特異な環境も相まって自我を確立出来ない不安定な少女に

そのような異常者とはかり深く関わらせるのは好ましくない、

と思うのも事実だが関谷は踏み込まずただ彼女が壊れないようにと軽く支えているだけである。

大切なのは距離感。

新たに舞い込んだ仕事はタナトスになり目覚める事無く眠ってしまった女性の調査という事であった。

イオの仕事を選び調整して連絡してきたのは海といわれる人工知能である。

海は女性の居場所や詳細を伝えると最後にこう付け加えた。

「還らずの森の悪魔も行く、とのことですよ」

それを聞いたイオは少し笑った。

通信は一方的に切れる。

イオは関谷に言う。

「しいも行くって。面白くなりそうだ。関谷も行く？」

「行かない」

「行くうよ」

「行かない」

「行くんだ」

承諾の返事はしないが、関谷は黒衣の替わりに黒い外套をはおった。

関谷の受け持つ患者はイオただ一人であり、また彼に関しては如何なる制限も設けられていないため、

外出は好きに出来るのだが、それを渋ったのは単に面倒くさかっただけだ。

しかし、取りあえず着いていくことにしたのは他ならぬイオの頼みであるということと徐々に三人で会うかと思つたからだ。

還らずの森の悪魔に会うのはなかなか至難の業である。

彼は有像無像の区別無くありとあらゆる事行つ事の出来る魔術師である、と本人はそう話している。

確かに彼に不可能な事は無いように思われる。

一体どうやって身に付けたのか怪しい程に。

病院の外に出て関谷の隣に並ぶとイオは微かな声で歌らしきものを詠う。

不確かな旋律と意味。

軽く関谷の外套の端を引く。

と同時に二人の周囲の空間が一瞬ぶれたと思つたらその姿がかき消えた。

そして二人が現れたのは、狭く位部屋であった。

目前に長い黒髪の人物が立っている。

イオは歩みよると声をかけた。

「久しぶり。有難う、しいちゃん」

しいちゃんと呼ばれた黒髪は応じる。

「久しいな、イオ。別に移動させるなんてたいした事では無い。

なんだつたらその黒いのはどっかに捨て置けば良かったな」

厚顔不遜、傲慢で尊大な魔術師。

それを聞いてイオは微かに笑い、また黒いのとと呼ばれた関谷は完璧に受け流し返事をする。

「腐れ魔術師め、ついに脳まで腐り溶けて無くなったのか？」

それを聞いて魔術師は

「違うさ。まっとうな人間として有害廃棄物を捨てようと思うのは当然だろう。一応燃えるごみでだしてやる」

と応酬する。

このようなやり取りは二人の間ではいつもの事で悪意や敵意などな

い挨拶のようなものだ。

しかし時間が勿体無いとイオは関谷が何か言う前に割り込んだ。

「二人共、遊ぶのは後にしなよ。仕事なんだ」

軽口を止めた二人と共にイオは部屋の隅の寝台に近付いた。

確かに、女性が寝ている。

大変美しい女性で一見ただ眠っているように見える。

呼吸など生命維持は自発的に行われているがタナトスは見当たらない。

イオは言う。

「タナトスが無い。この人、死ぬよ」

その時、部屋の扉が開いた。

「だっ、だっ、誰だー」

酷く狼狽した男性が駆け込んでくる。

そしてイオ達と女性の間立つと睨んだ。

「どうやって入ったんだ？ククに近寄るなー」

嗚呼、とイオは思い出す。

自分達は玄関から入ったのではなかったと。

見つけた。

しかし今更後悔しても遅い。

魔術師と医師はさも無関係の如く静観している。

「貴方は誰だ？私はその女性の調査を頼まれた。その女性の姉に」

イオはまるで悪気なくくりだす。

「えっ、ムムが？」

男性は狼狽するが一步も引かない。

「そう。双子の妹が目覚めないからって。タナトスが無いからそれが原因じゃないかって」

男の顔からは血の気が引き冷汗まで浮きはじめた。

「そ、そんな筈は…」

「有るわけ無いって？そりゃ信じられ無いよね、自分でムムが死んだのを見たから」

イオが全く静かに述べると、男は黙れと叫びながらイオに飛びかかった。

しかし、それまで傍観していた二人が禦ぐ。

「関谷、殺るか？」

魔術師は物騒な事を呟く。

「止めとけ紫苑、貴重な証人だ。」

しかもこいつ自分の悪事がばれたからってイオに手をだそうとしたんだ。

俺の実験で使う。死にたくなるほど後悔させてやるぞ」

男は魔術師、紫苑に魔術で床に投げ出され、関谷に頭を足蹴にされ、更に追い討ちのような台詞をかけられた。

そこでイオが言う。

「馬鹿だな、あんた、ほんと。でもさ、なんでムムを殺したんだ？
言えよ」

関谷は足を退けるが男は答えない。

腰が抜けたのか立ち上がろうとするものの、叶わない。

イオは更に言葉を紡ぐ。

「自分の口で自分の意思を語るんだ」

男はようやく脅えた風に喋り出す。

「…そ、そんなつもりじゃ…。…殺す気はなかったんだ。」
話しているうちに落ち着いたのか、はいつくばった姿勢から床に座り直した。

そして反省した様子で続ける。

「そう、ちょっとした手違いだったんだ。先日私は骨董品の店である不思議な硝子瓶を見つけた。

つい衝動買いを為してしまったが、それがどんなものなのか知らずククに贈ってしまった。

不幸にも彼女は気に入ってそれを飾っていた。

しかしそれはタナトスの中に封じてしまうものだったらしく、

知らずその瓶の蓋を触ったムムはタナトスを取り込まれてしまった。

私はククから連絡を受けて急いで駆け付けた。

私だって何とか助けだしたかった。

しかしどうすればよいか分からず…そうこうしているうちにタナトスを失ったククの身体、

コギトは冷たくなっていった。

その後、今度はククが蓋に触ったら、

ムムのタナトスが出されククのタナトスが吸い込まれたのだ。

僕は、でも、どうしたらよいかわからず、

かといって自分に取り込まれる勇気もなくただククの体を守ってるのだ。

そこまで話終わると男は黙って下を向いた…所をイオが軽く蹴る。

「嘔吐き」強く鋭い言葉で男を非難する。

関谷達は黙して見守る。

男は何が起きたのかとほうけた顔で見上げる。

「嘘だ。全部知ってる。ムムから聞いたんだ。

助けたくともどうしたらいいかわからなかった？

助ける気もなかったくせに。

ククの見てくれが気に入った。でも中身は気に入らない。じゃあタナトスを封じてしまおう。

そのためタナトスを閉じ込める瓶を買った。外見も中身も好みじゃないムムはその実験台に。

タナトスとコギトは長く離すと死んでしまおうと知っていながら、

そして瓶の使い方を知りながらムムのタナトスを戻さずに見殺しにした。

ククの時は時折戻してるんだろう。そしてまた瓶に入れる。

…最悪な嘔吐きめ」

イ才は全く静かに断ずる。

そしてククの側に寄り瓶を手に取ると紫苑に向かって放った。

男はやつと慌てたが、動く前に全てが終わった。

紫苑は何処からともなく水を注ぎ、瓶が一杯になると中からククのタナトスが出てきた。

それはコギトに戻ると、ククは目覚めた。

「…有難う」

小さくでも柔らかかいククの声。

イ才は少し目を細めて言った。

「御礼はムムに。タナトスだけの状態で限られた時間しか存在出来ないのに、知らせてくれたから」

いつの間にか関谷が側に来ていた。

医者らしく軽く脈を取ったり呼吸を診たりしたあと

「大事は無い。取りあえず寝な」

と休ませる。

それを聞いてイオはようやく安心し、男の方を振り向いた。

紫苑が瓶をもて遊びながらさりげなく男に話かけ束縛している。

「この我が侂な瓶はいつもお腹が空いてるから何かを入れて満たせば満足して吐き出すって説明つけたはずだよなあ。」

まさかタナトスまで食うとは考えなかったが

男はこの言葉に腰が抜けたらしい。

「じゃ、じゃ、お前が悪魔…」

と恐怖混じりにかろうじて呟く。

「…あの古物商の言った事は本当だったとは…」とぼんやりと吐く。

「悪魔とは失礼な。大方悪魔の手に因るから何でも閉じ込められるとか言われたのだろう、こんな使い方をするとはな」

と魔術師は瓶の中の水を捨てる。

そして今度はイオが会話に入ってきた。

「やっぱりしーちゃんが作ったんだね、その瓶」

特に責めるでもなく静かなイオの声には確実に怒りが内包されている。

紫苑はしかし、平然と答える。

「ばれてたか」

「うん。じゃなきゃ君来ないだろう。でも、なんで？」

なんでそんなの作ったのかと尋ねる。

「作りたかったから。私は意匠さ。物を創る存在だ。ただ魔術も使えるからこんなものになってしまっただけ。ただ作りたかった」

魔術師の言葉は響く。

罪悪感も反省も無く平然と。

魔術師はイオに近づき瓶を渡す。

「でも、作ったら、要らないから売ったのさ」

そして、イオの髪をくしゃと撫でて姿を消した。

「…逃げた」

少し悔しげに呟くイオの肩を関谷が軽く叩く。

「いつもの事だろ、帰るか」

そして男を立ち上がらせる。

外に出ると既に連行用の係がいた。

紫苑が呼んだらしい。

男を引き渡す。

去り際、男が悪いのはあの魔術師だと言っているのが聞こえた。

一理あるなと思いつながらも、イオはこう考える。

道具は道具に過ぎず。

使う人の意思によりいいものだったり悪いものだったりする。

結局使い方を誤ったあんたが悪いんだ。

イオの言葉は届く事無く、あの男はずっと回りに責任転嫁していくのだろう。

「関係無いさ」

イオは病院に戻り中断したお茶会を再開しやがて帰宅した。

結局瓶は関谷が引受ける事になった。

今でも関谷の部屋にある。

金魚が中を泳いでいる。

いわゆる はじまり

いたい。

たすけて。

引っぱりなしに其の声ばかりを捨う。

俺の頭に埋め込まれた機械は辺りの電波一切合財を受信するらしい。

そして此処は戦場。

勇敢な戦士と讃えられる人も戦いとは全く関係無い人も思っていることは同じということか。

煩い。

俺は早く立ち去るため目を閉じ呪文を唱えた。

『時間を司る者、空間を司る者、我は其の係累なり。

我は破壊を望む。

圧縮せよ』

いつも通り音も無く、只だ圧力の余波のみが微かに感じられる。そしてゆっくり十を数え目を開く。

俺を基点に周囲は見渡すかぎりまるで巨大な岩でも落とされたかの様に潰されている。

いくばくか残留してはいるものの粗方声は消え去った。

「さっぱりしたな」

正直それくらいしか頭に浮かばなかったが、そう呟いて其の場を去った。

俺は祕稀ひひ、しがない傭兵だ。

そして 物語は 始まった

「新しいおもちゃを作ったんだ」

イオが唐突にそう切り出してきた。

此処はいつもの診察室。

イオもまたいつもの如く注射を打ちにきた。

そして今は治療を終えてお茶でも飲んでいるところだった。

心地好い沈黙。

生み出しそしてそれを壊すのは、いつもイオだ。

俺は大体黙っている、か、軽く相槌を打つだけだ。

彼女はまたぼつぼつと語る。

「新種の玩具、或いは兵器みたいなものを作ったんだ。

その、あの、父様と私で、ということなんだが」

そしてまた黙る。

意図的なのか無意識なのかはわからないが、これ以上を彼女が進んで話すことは無いだろう。
先を促さない限り。
しかし興味深い話ではある。

「んで、どういう種類のおもちゃなんだ？」

すると彼女はまたしゃべりだす。

「えと、あの、えー、タナトスを外から干渉して引き剥がすの、好きな時に」

「無理矢理にでも？」

「強制的に」

それで『兵器』でもあるのか。
でもまだ『玩具』がわからない。

「んで、それをどう使うんだ？」

「えと、んと、遊ぶの、タナトスのままで」

「…すまん、わからない」

「だから、タナトス状態を人工的に作り出して、その状態で遊ぶんだ」

段々冗舌になつてきた。

あとは軽い相槌だけでも話すだろう。

「関屋も知つてるだろ。」

タナトスだとかなりの制限が無くなるから今までに無かったほどの、それこそまさに非現実的なアトラクションが作れるんだ。

タナトスとは一種のエネルギー体の実像だ。

光と同じで触れないけど見える。

或いは音と同じで実体を持たない振動みたいなものだ。

だからアトラクションにしたって、そういうのを作ればタナトス状態で遊べるんだよ。」

まあ何となくわかったかわかってないかというところだな。
とりあえず頷く。

イオは紅茶を二口のもんでまた続ける。

「アトラクションに於いて注意しなければならないのはタナトスの

安全。

どろいうファクターがどろいう風に影響するかはまだよくわかってないけど、

とりあえずタナトスが傷ついたら死んでしまう。

それから時間。

離れすぎると死んでしまうから。

つまり、注意事項が致死的問題に直結してる。

それがアトラクションとしての実用化に向けての難点なんだ」

三人のお茶会？

「兵器としてはむいてるのにな」

急にドアのほうから声がした。

見ると、真っ黒なまさにマントを着た男が立っている。

「おや、しーちゃん、久しぶり」

イオが声をかけると彼はテーブルの方に歩いてきた。

「やあ、イオ、久しぶりだね」

そついいながら今のままで椅子が二脚しかないこの部屋に、言葉通り『何処からか』もってきた椅子に腰掛ける。

そして何時の間にもやらテーブルの上には空のカップとソーサーが一組増えている。

全く…、と思いながら幾度となく繰り返した注意を口にした。

「紫苑、玄関からそしてドアから入れ、椅子はあとで帰しとけ、ここで魔術を使うな」

紫苑は何処吹く風で笑う。

「相変わらずだな、関屋」

「それはてめえだろ」

「でも現れる先をドアの前にはしたからいいじゃないか。何となくドアから入ってきた雰囲気がするだろ」

「雰囲気の問題じゃない」

そう話していると程よくお茶が蒸れたので紫苑と空になっていた俺とイオのカップに注ぐ。

見ると、紫苑はまた魔術でも使ったのだらう、席をたった様子でもないのに壁にマントがかけられている。

しかし面倒臭くなったのでちらりと目で見やるだけにした。

マントの下には白い開襟のシャツに濃紺のスラックスと普通の人の

服装だ。

時に何処ぞの民族衣裳を着てたりもするので全く謎なやつではある。帰らずの森の悪魔と呼ばれ、魔術師として名を馳せているだけでも十分変だが。

落ち着いたところで紫苑が切り出した。

「イオ、さっきの話だが、それで結局アトラクションはできるのかい？」

「ああ、うん、出来たよ」

出来た？

安全やら時間やらの難点がどうこう言ってただろうに。

「それは、もう完成して公開されるかされたってことか？」

紫苑が尋ねる。

「うん、完成はしてる。最近ね。」

けどまだ公開はされてない。

なんか、それがつくられたのは『エクリプス』って言って、そっいう今までに無かったような体験のできるアトラクションを集

めた新しくできた遊園地なんだ。
プレオープンとかやらずにその開園記念のイベントの時に初披露するんだって」

そういうものか。

そこで俺も口を挟む。

「問題点とやらは解決したのか？」

「したといえはしたっていえるのかな」

「歯切れ悪いな」

「そうだね。結構厄介なことなんだよ。
安全にかんしては色々試してみて大丈夫だったものを使って、
アトラクションゾーンに持ち込みをさせないようにしてる。
けど何がどう起こるかはわからないし。
時間にかんしては剥がすのと逆に強制的に戻すことにしてる。
でも安全な技術とはいってるけど結局長期でみてどんな障害を生じ
るかは今のところ予測不可能だから。
私と父様はそういうリスクも説明してる。
だから色々の責任はアトラクション側に生じるけど」

机上の空論は続く

「実は見切り発車な感じだな。
で、タナトスを剥がしたり戻したりって具体的にはどういう技術なんだ」

「タナトスとコギトはどうやってアモの状態を保っているかと言えば同調してるんだ。
個々の生命で微妙に異なるのだけど。」

それでね、まずその個体の同調律を感知してちょっとだけずらしたものをあてるんだ。

タナトスはコギトより影響を受けやすいからタナトスが引きずられない。
てる。

すると同調が乱れ繋がりが弱まる。

そこでタナトスがくっつくものでタナトスを引っ張る。
金属と磁石みたいな感じでね。

それで剥がせる。

また、戻すときはね逆なんだ。

離れたタナトスはやがて安定した律を持つ。

だから剥がして安定したら其の律を記録するんだ。

それをもとに、タナトス呼び戻してコギトの律をタナトスにあてるとアモに戻る。

そういう感じかな。

それでね、律を検知する機械を父様が作ったの」

「律ねえ。なんか眉唾だな。実感が湧かない」

「関屋、勿論今のは例えだよ。分かりやすく言っただけ。実際の理論はもつと論理的だ」

「認識はしてるが理解には至らないという感じなんだよな。」

まあそれを言うなら紫苑の方が嘘臭いよな。魔術師だということもその存在もさ」

さり気ない俺の暴言に紫苑が反論する。

「嘘臭いとは失敬な。大体、私は意匠が本職であつて魔術は趣味さ。しかし魔術だつて理論に理論を積み重ね数と式とに表される論理だよ。」

そついう点ではタナトスと同じだ。ただ発現形が異なるだけだ。

物理学の延長にタナトスがあり化学の延長に魔術がある、そついうことさ」

「ああ、何か似たような事を祕稀もいつてたな」

「彼も一応私の弟子だからな。お前の弟にしては筋が良いよ」

「どついう意味だよ、煩いな」

結局話が二転三転してしまつたが、仕組みの概要は何となくわかつた。

本当は医師の端くれとしてコメントしたいが、何とも言えないのが正直なところである。

タナトスに関しては未知数な部分が多いのだ。

「そういえば、祕稀が帰って来るときいたのだが」
紫苑が言う。

「さあ。どちらにしろ俺には何も連絡しないのじゃないかな。あいつ俺の事嫌ってるから」

原因はわかってはいるがどちらが元凶なのかは分からない。

とにかく祕稀は俺の事を嫌っていて、俺は祕稀だけではなく一般に誰も相手にしない。
話すのはイオと紫苑くらいだ。

「祕稀？昨日会ったよ」

イオが事もなげに言った。

「はあ？」

驚いた。
とても。

思わず声が出るほどに。

何処に居て何をやってるか全く分からない祕稀に会ったと言っこともだが、

家族や俺や紫苑以外の人間と会うことが皆無に近いイオが会ったということも驚愕だ。

「さっき話したエクリプスを開園の日、

イベントのクライマックスの時に壊すという予告状が園長さんに届いて、
その阻止の為に園から幾人か傭兵を雇ったらしいんだ。
その中に祕稀もいたみたいだね。
傭兵の初顔合わせが昨日エクリプスであって、
私は父様と一緒に装置の最終調整の為にエクリプスに行っていて、
偶然ね」

傭兵に敵や味方など意味は無い

「祕稀、まだ生きてたのか」

物騒な言葉とともにばんと後ろから肩を叩かれた。

「ああ、悪かったな。死にかけはするんだが、なかなか悪運が強くてな。」

アライエル、お前こそもうとっくにくたばってたと思ってたが」

振り向きざま肩に置かれた手を掴み鳩尾に一発打ちこむ。

しかし俺の数倍ありそうな頑健な体を見ごと軽やかに宙に浮かし、捕まれた手はそのままにひらりと交わす。

所詮ただの挨拶。
手を離れた。

アライエル・ハドソン、もともとは何処かの軍の大尉だかなんだかだったらしい。

しかし、詳しい事情は知らないが今は傭兵となり、やはりその有能さ故名を馳せている。

傭兵を集めての作戦のときは指揮官的役割を果たしていることが多く、俺も何度となく仕事をともにしたことがある。

優秀で有能かつ慢ることなくさばさばした性格で付き合いやすく、
外聞も内聞もよい。

俺も一緒に仕事をするのは悪くないと思う。

「お前も呼ばれたのか。ってことは、今回は結構物騒ってことだな」
服を払いながらアライエルがいう。

「そうだろうな、俺とお前が呼ばれるのはそういう話だろう」
そう答える俺の後ろから声がかげられた。

「やあ祕稀、アライエル、軍師と魔術師がお揃いとはおっかないこ
とで」

振り向くと金髪碧眼の美しい俳優のような男が立っていた。

「マーフィス！」

久々に会う馴染みの顔に思わず駆け寄ると、

「あっちにはほとんど集まってますよ、そこも凄い顔触ればかりで
す、早くいきましよう」

と挨拶もそこそこ、マーフィスにひっぱっていかれた。

「うわ…」

ホールに連れていかれた俺は言葉が出なかった。

「なんだ、戦争でも始める気か？」

後から付いてきていたアライエルも驚いたように洩らした。

戦争、確かにそんな感じだ。
しかもかなり大規模な戦争。

そんなものができそうなくらいな顔触れだ。

軍師と呼ばれるアライエル、魔術師と呼ばれる俺、策士と呼ばれる
マーフィス、などなど二つ名をもつものがごろごろいる。

二つ名は傭兵のなかでも強い人物に対して称賛のようにつき、噂の
ように広まるものだ。

だから二つ名をもつものは少ないし、会うことなど滅多にない。
会っても敵としてであったりする。

二つ名をもつものが二人同じ軍に属するだけでも戦いの規模が大き
いということなのだ。

なのに、ここには二人どころじゃない。

まるで世界中の猛者を集めたようだ。

「いったい誰を相手に戦うんだ？」

マーフィスに尋ねるが、やつも首を振り答える。

「さあ？ 私にもまだわからないですよ。もうすぐ雇い主が説明に
くるそうなので、そしたらはつきりするとは思いますが」

情報に精通し人の心を読むのが巧い策士の言葉はあてになるのやら
ならないのやら。

でも、ここで隠しても仕方がないのだから、本当にわからないのだ
ろう。

別にわかったからといって状況が変わるわけではない。

俺は久々に顔をあわせる面々と話をして時間をすごした。

しばらく経ってからホールの壇上に小太りの小さい男がマイクを持

つてたつた。

「みーなーさん、こんにちわー」

何を血迷ったのか、その男はマイクに向かって叫びやがった。

高性能な集音マイクが余すところなく声を拾い増幅する。

煩い。

なんだ、あの馬鹿、と殴りに行こうとしたらマーフィスにとめられた。

八つ当りにマーフィスを睨む。

「あれが今回の雇主だよ」

状況からかんがえると確かにそうだろう。

とりあえず、邪魔せず話を聞いてやることにした。

我慢の続く限り。

「ごめんなさい、緊張してしまいました、つい、大声が、

あ、あの、私、今回皆様をお呼びさせていただいた、テーマパーク
エクリプスの園長、イン・ユエと申します、よ、よろしく。」

園長はたどたどしいながらも話し始めた。

教義 と 正義

「あの、今回、皆様をお呼びしたのはですね、あの、予告状が届いたのです、テロの予告状が。」

2週間後の開園の日にイベントをおこなうのです、そのイベントのクライマックスに、園を壊すという予告状なんです。

差出人は聖なる予言を成就させるための教団、通称オベリオンという団体です。

皆様もご存じのかた、いらっしゃるのでは？」

オベリオン、知ってるも何も、ここにいる奴らなら大方、大なり小なりかかわったことがあるのではないだろうか。

それも敵対したやつらしかいないだろう。

あの団体は予言の成就といいながら至るところで火種を起す。

俺が先先月受けた依頼も確かオベリオンが原因だった。

病気を治すために七人の女性の魂が必要という予言の成就のため、

三人の女性が殺された。

四人目の時点で俺が阻止して、犯人も捕まった。

犯人はオベリオンの末端の信者で詳しいことはしらず、

それでは予言を与えた人物を探そうと思っただら教団の支部はもぬけのからで、後には手がかりも何も残ってなかった。

それだけならただの危険思想な教団だが、実はもつと厄介なのだ。その殺人事件で亡くなった女性は一人は有名事業の後継ぎ、

一人は某企業の子会社で一番売れてる企画の担当者、

もう一人はある会社のイメージキャラをつとめていた女性。

三人の死により、株価の大変動が起き、その際巨額の利益を得た人々がいるという話が有った。

それがオベリオンといわれているのだ。

つまり、何らかの意図を持って事件や事故を仕組んでいるらしい。

本当に厄介な存在である。

またオベリオンにはなぜだか軍人や学者やらが惹かれて入っているようで、そういう意味でも侮れないのだ。

「冗談かとも思ったのですが、その外にもいくつかオベリオンから予告状が送られていて、

それが実行されたので、やはり本当だと信じざるを得ません。

当初はマーフィス・グレンダさんを雇っておりましたが、

イベントの規模がかなり大きいので何かあったら一大事なのです。

そこで万全をきするため、彼のご紹介により、皆様にもご依頼することになりました。」

たどたどしさが消えた園長の言葉を思わず聞き流すところだったが、ちゃんと聞いていた。

「マーフィス、てめえ、全部知ってやがったな」

マーフィスのほうを向くと相変わらず優雅な笑顔を浮かべている。

「ええ、まあ。…だって、貴方、騙すと反応が面白いんですよ」

「だって、じゃねえ。…『風』」

俺は一言で小さい『風』を喚んでマーフィスの前髪を切り落とした。

マーフィスは「セットしてるのに」と全く顔色に変化なくいう。

もちろん、狙えたのは髪だけではない。

ただ、俺が今は髪以外を標的にするような馬鹿ではない、そうふんだうえで微動だにせず微笑みを絶やさないこの性格。

ほんとに殺してやろうか。

なんて考えてみたりする。

ところがマーフィスは気にせず園長のほうを示す。

「話は終わってませんよ」

兎にも角にも仕事は始まる

園長は続ける。

「報酬はイベント終了後にお支払いいたします。それについてはあとからお配りする資料を参考にしてください。また陣頭指揮は策士マーフィスさん、軍師アライエルさん、魔術師祕稀さんにとっっていたいただきます。」

46

厄介なことになった。

指揮を執れと。

俺には単独行動が向いてるのに。

「マーフィス、てめえ計りやがったな」

睨み付けると平然とした表情で奴はいった。

「勿論」

しかし俺が何か仕掛ける前に俺の口を手で覆い、
「これも仕事のうちですよ」
と畳み込むように言った。

釈然としない。

…仕方ないか。

アライエルの元に行く。

「あんたに任せるから、よろしく」

アライエルも苦笑しながら頷く。

園長のほうを見やると舞台のそでに戻って誰かと話しているのが見えた。

イオ？

博士もいる。

ああ、確かタナトスを利用したアトラクションもあったか。
最新鋭の設備の整った施設。

その中の一押しアトラクションの一つがそれだった気がする。

会話の途中で園長がマーフィス、アライエル、そして俺の方を見や
った。

恐らく警備の責任者だと説明してるのだろう。

園長に続いてイオとタナトス博士も視線を動かす。

一瞬に満たないくらい、僅かに、だが、確かにイオの視線が俺の上で止まり、
また園長のほうに戻っていった。

（祕稀、久しぶり）

突然、必要の無いときは断っている筈の装置の回路を利用して、イオの言葉が飛んできた。

一体どうやって、等という疑問はもう捨ててしまった。

とにかく、イオにはそういう芸当が可能なのだ。

タナトスとはそういう技術なのだ。

しかし、イオは滅多に他人と会話したりしない。

家族か、関谷か、紫苑か、仕事か。

久しぶり、なんて『挨拶』を寄越すことが信じられない事だ。

（聞こえてるだろ、祕稀、久しぶりだな）

慌てて俺も言葉を返す。

（ああ、聞こえてる。久しぶりだな、イオ）

どうやらタナトス博士と園長が話をしているらしく、

イオは話を聞いている振りをして俺に意識を飛ばしているらしい。

（祕稀、あんたが警備の責任者らしいな。聞いたよ。てっきり一匹狼が似合うと思っていただけだな）

(全くだ。俺も今聞いたのさ。馬鹿馬鹿しい。でも、まあ、仕事だからな)

(ふうん。ところで、関谷やしーちゃんには連絡しないのか?)

(紫苑には何もいわずとも伝わるさ。関谷は別に知りたくもないだろうし、言わないさ。)

(じゃあ、私が言ってもいいか?)

(・・・別に構わない)

何なんだ。

イオは一体何の用が在って話しかけてるのが、全く判らない。

電心交流

(何なんだ、一体)

(そう急くな。

話は変わるがな、此処が狙われるのは此処の土地に理由が在るらしい。

此迄も今も此れからもこの土地は呪われ血に塗れ死に満ちた場所なんだ。

そして、血と死と呪いを重ねる程土地の力は高まる。
だからこそ狙われる。)

全く初耳だった。

(なんだそれ)

(これが本題だよ。

まあとにかく話を聞いてくれ。

そういう曰く付きの場所なんだ。

そして開演イベント。

だいぶ注目されているから、大勢の人が集まるだろう。

（それで得られる力は莫大なものだろうな。

そりゃあ、テロを起こしたくもなるだろうさ。

恐らく得られるのは力だけではないだろうしな）

力、だけでなく、金も動くことだろう。

（そゆこと。さすが祕稀。聡いね）

（馬鹿にしてるのか）

（さあね）

（まあいいさ。しかし何でまたそんな物騒な場所につくったんだろ
うな）

（知らない。園長に聞いてくれ。君の管轄だろう。

それに君には『耳』がある。土地の記憶も聞けるだろ）

（まあな。とりあえず礼を言っとく。助かった、有難う）

（どういたしまして）

（あ、あと、そのネタの出所は？）

(関谷さ。)

といつても随分前にオベリオンについてちょっと調べてて、その最近の活動を関谷が教えてくれたって感じかな。

物騒な場所で物騒な事を起こして何かを手に入れてる、ってね。んで物騒な場所は幾つか聞いていたんだけど、

偶然その内の一ヶ所にエクリプスが建設されることとなり、エクリプスのアトラクションの開発依頼を父様がうけたのさ。(

(関谷、か…。)

(オベリオンについてもまだもっと詳しく知ってると思う。挨拶が
てら会いにいけば？)

それだけ言うと、イオは一方的に通信を切りやがった。

遠目に見てもタナトス博士と園長に顔を向けてるのは変わらないまま。

勝手なやつだ。

でも、まあ、自分から話し掛けることなんてしないと思っていたから、

情報を与えてくれただけでよしとしよう。

さて、そろそろ始めるか。

『 傭兵、魔術師祕稀はイン・ユエからの依頼を引き受けた』

小声で呟く。言葉にして誓約を立てる。
仕事の開始の合図。

手始めは…情報収集だ。

魔術師の手品

「祕稀は…元気そうだったか？」

他に尋ねる事もなく、とりあえず当たり障りのないコメントを返す。

「ぎこちないな、関谷」

笑いながら紫苑が横槍を入れてくる。

黙れ、と睨むが気にした風もない。

「調子はまあまあなんじゃないかな。」

エクリプスの園長は沢山の傭兵を雇ったみたいだけど、その指揮をとることになったみたいだ」

「珍しいな。集団行動は苦手だと思ってたが」

「ははは。私もそれは突っ込んだよ。」

そしたら本人もそうだった。でも、仕事だからって。」

「関谷に似ず、真面目な事だ」

紫苑がからかう。
俺もそう思う。

でも。

「てめえに言われたくない」

「兄にも師匠にも似ず、だね」

冷静にイオが言った。

言い返す気も失せた。

「それで… 祕稀の事はいいとして、紫苑、あんたは何できたんだ？」

滅多に外に出ないやつなのだ。

そのうえ人に会うのもうざいと嫌がるやつな筈だ。

それでもきたのだ。

しかも、俺の処に。

きつと何か用が有るに違いない。

それもまた格別に厄介な用だろう。

「別に。たいしたことじゃないわ」

嘘つけ。

「まあちょっとね」

早く吐け。

「会いに来たのさ」

ボタンと扉の開く音がした。
この部屋に近づこうなんて人間なんて限られてる。

見ると…件のそれはもう久方ぶりに会う弟が立っていた。

「祕稀にね」

魔術師は手品を成功させたように微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7360w/>

タナトス

2011年11月10日05時41分発行